

那波本の源流と成立

神鷹徳治

The Origins and Establishment of the Nawa Edition

KAMITAKA Tokuharu

- ①〈旧鈔本〉の成立と伝存
- ② 那波本「白氏策林」と旧鈔本及び『文苑英華』

【論文要旨】

我が国には、唐鈔本（作品が写本から版本へと形態が移行する以前、書写で流布していたテキスト）に由来する旧鈔本と呼ばれる写本資料が伝存している。金沢文庫旧蔵の『文選集注』や、『白氏文集』は、そのよく知られている旧鈔本である。この旧鈔本は、白居易詩文の本来の編成と本文とを留めており、テキストとして極めて貴重な資料である。現在、中国や日本の『白氏文集』の版本の中では、日本の元和四年に那波道円によって刊行された木活字本『白氏文集』は、その旧編成を留めるテキストである。ただ、版本であるので、その本文は宋本系のテキストに属している。ただし、旧編成であるので、その直接の底本は北宋刊本かと推定される。北宋刊本には、旧鈔本の本文が、これまた遺存していたと推定される。今回、私は、特に『白氏策林』の四巻を中心にして、那波本・朝鮮本（整版本・活字本）・紹興本との細かい異同を調査してみた。その際、『管見抄』（旧鈔本）及び北宋前期に成立した『文苑英華』の本

文も参照した。その結果、那波本には、上述の推定の如く、少数の例ではあるが、旧鈔本の本文あるいは北宋刊本の本文が遺存していることが判明した。今後は、他の巻数に対しても、以上の諸本を使用して細かい校異を作製することによって、従来埋もれていた旧鈔本乃至北宋刊本の本文を見いだすことができるのではなからうか。日本所在の那波道円刊『白氏文集』の諸本には、旧鈔本との異同が書き入れられているテキストが少なからず存在している。宮内庁所蔵の那波本『白氏文集』がその一本である。中国本土では唐鈔本はもとより、旧編成を残していた北宋刊本も全く減んでおり、南宋版も前詩後文本の新編成の宋版しか遺っていない。従って、那波本の旧編成は『白氏文集』全体を解釈する為には極めて貴重な資料と言えよう。那波本の直接の底本となっている朝鮮版（整版本・活字本）との校異が、今後の大きな課題である。

【キーワード】旧鈔本、北宋刊本、紹興刊本、那波本、朝鮮版

①〈旧鈔本〉の成立と伝存

〈旧鈔本〉の成立

わが国には、唐鈔本（作品が写本から版本へと形態が移行する以前、書写で流布していたテキスト、〈鈔〉は抄と同じ）に由来する旧鈔本と呼ばれる写本資料が伝存している。これらの写本群資料は、奈良・平安（前期）時代に、遣唐使・留学僧等によって、日本に将来された唐鈔本を、直接の底本として、我が国で重抄されたもので、後世の刊本を転写した転写本と区別する為に、わが国の書誌学界では旧鈔本と呼称されている。⁽¹⁾金沢文庫旧蔵の『文選集注』や『白氏^(ハクシ)文集^(フシシ)』⁽²⁾は、そのよく知られている旧鈔本である。これら旧鈔本資料は、後に詳述することにする、宋刊本に代表される諸刊本と比較するに、印刷による校訂を經ていないので、それだけに、刊本に見られる恣意的改変を免がれ、原本に極く近い編成と、本文を今にして留めている数少ない資料と云える。さらにその書写時期が遙かに下ることがあっても、わが国に於ける中国文化への尊重という事情も加わり、無意識の誤写や書写に伴うミスはありえても、意図的改変はなかったものと推定される（具体的には、左記の二拙論を参照されし。）

一 「管見記『紙背の『文集』について―解説と翻字―」(『懷徳』二六六号、一九九八・二)

この紙背『文集』の書写時期は、鎌倉末期から室町初期頃と推定されてはいるが、その本文は、旧鈔本系『白氏文集』に属する一資料であることを考証したものの。

一 「『秘府略』紙背白氏詩篇の本文の系統について」(帝塚山学院大文学部 日本文学科『日本文学研究』三〇、一九九九・二)
国書である『秘府略』紙背書写の作品と『千載佳句』引用文中

〈宋刊本〉の成立

国刊本『文苑英華』等所収作品を相互に比較対校することにより、紙背の白氏詩篇が、旧鈔本系のものであることを考証したものの。

中国では、後漢の蔡倫（一〇五?）が紙の製作実用化に成功して以来、長期に亘り書籍は書写によって伝えられた。印刷術が書籍に応用されたのは、唐代の前期ごろと推定されている。⁽³⁾

それは、仏典から開始され、曆・字書と云った実用書がそれに続き、その他の本格的外典類が刊行されたのは十世紀前半の五代に始まるといわれている。但だ、写本が印刷されたとしても、全体からすれば、ごく一部で、書籍の大半は、写本、即ち鈔本であった。次の北宋に至ると、国家的援助、庇護が加わり、その出版量も、写本のそれにかなり近づいたようである。遂に南宋になると、江南の経済的繁栄に支えられ、図書の主流を刊本が占めるようになった。以上の如く、現行漢籍のテキストは、(北・南) 宋版に発しているわけである。このような事情により、(北・南) 宋版こそは、従来の書写資料の唐鈔本が、刊本図書にその形態を変化させた最初のテキストと云えるわけである。従って、(北・南) 宋版本は、唐鈔本を直接継承している上に、芸術的にも云えるその美しい刻字と相俟って、信頼できるテキストとして現在に至るも高い評価を得ている。しかし、ことに戦後、わが国に於ける旧鈔本資料と宋版諸本の比較研究により、宋版本に予期せざる大量に亘る本文の改変が存することが明らかになった。とりわけ、『白氏文集』については、平岡武夫氏校定『白氏文集』により、明白な事実が報告されている。

現在、ほぼ完本に近い宋版『白氏長慶集』は、その刻工名より推定するに、南宋初期の紹興年間（一一三一―一六二）の刊行とされている（『中国版刻図録』解説）。但だ、現存諸刊本のうち、那波本『白氏文集』⁽⁴⁾の刊行時期は、遙か後の、元和四年（一一六八）であるにもかかわらず、

作品順次は原編成を保ち宋本の本文を持つ、やや複雑な資料であるので、以下、少しく私見を述べることにする。

『白氏文集』の北宋刊本が存在していたことは、藤原道長『御堂関白記』寛弘七年（一〇一〇）十一月二十八日、長和二年（一〇一三）九月十四日の両条に〈摺本文集〉と見えるのがそれである、この記事は、北宋前期の真宗（九九八—一〇二二）の頃に相当するので、前期の北宋版『白氏文集』の存在が確認される。しかし、この北宋版の現存本は現在のところ日中両国にもその所在は確認されていない。それでは、何故、北宋版『白氏文集』は、注目されるのであろうか。南宋以後の諸刊本と比較すると、那波本の詩文の編成は、白氏自ら行った唐鈔本の原編成をほぼそのまま踏襲していると見られるからである。即ち唐鈔本の詩文の編成は、〈前集・後集・続後集〉となつてゐるのに対して、南宋以後の、諸刊本は、おおむね〈前詩・後文〉（前半を詩篇、後半は文章に二分されている）という新編成となつてゐる。加之、本文そのものにも大きな改変が施されたものと推測される。⁵⁾

中国本土に於いては、旧編成を伝える〈前集・後集・続後集〉本は、遂に明代以降、消滅するに至つた。この失われた旧編成を、今にして保存しているテキストこそ、那波本『白氏文集』なのである。但だ、この拙稿を執筆する際、日本文学研究者側の那波本『白氏文集』についての理解を改めて検討したところ、やや混乱した理解が存するかに私には思われた。那波本『白氏文集』は朝鮮刊本（直接には、銅活字本を底本としている）に出自している。その朝鮮銅活字本の直接の底本は、花房英樹氏が述べておられるように、南宋中期の蜀本に由来するものと思われる⁶⁾。しかし、編成は〈前集・後集・続後集〉本となつてゐる。これに依り那波本文をも、北宋版のテキストとみなされるようである。那波本『白氏文集』は、全集刊本として確かに旧編成を留め、且つ他の〈前詩・後文〉本には見られぬ詩文を有してはいる。しかし、全体に亘つて

その本文を旧鈔本系テキストや紹興本と対校すれば⁷⁾、この二つのテキスト即ち、那波本・紹興本は、極めて近い本文を共有している。更に北宋中期成立の『樂府詩集』と細部を比較するならば、那波本は紹興本より、やや下のテキストかと私には推定される。この視点に立つて諸刊本における那波本の位置を定めるならば、那波本が南宋本系のテキストであることが一層鮮明に判明するのである。⁸⁾再度繰返す。那波本系のテキスト（朝鮮銅活字本及び同整版本）は、その詩文の編成は確かに旧編成ではあるものの、その本文は、新たに改変された南宋版系のテキストであると。

以上、述べてきたように、旧鈔本系及び宋刊本系テキストとを比較・校勘する場合、那波本『白氏文集』本文の、諸本間に占めるその位置として、南宋中期頃に措定することにより、諸本間に於ける本文の変化の様相が明確に浮かび上がってくるわけである。

② 那波本「白氏策林」と旧鈔本及び『文苑英華』

さて、以上の如く、那波本の源流、そしてその直接の底本である北宋刊本⁹⁾との関連を述べ来たのであるが、ここでは、北宋刊本との関連を再度検討してみることにする。

橋本進吉氏は、那波本の直接の底本を、那波本が作品の旧編成を留めているという事実から、那波本そのものも、北宋本系のテキストではないかと推定されている¹⁰⁾。この指摘は、現在の『白氏文集』校勘学の成果より見れば、再検討を要するものと思われる¹¹⁾。さらに、那波本は、その本文が南宋中期の頃の宋版系のテキストに改変されてはいるものの、北宋刊本の作品の編成を基本的に踏襲している以上、改変漏れの本文が少数と雖も遺存している可能性があるのではなからうか。筆者は、この度、改めて「白氏策林」四巻を南宋紹興刊本と那波本の校異を細部に亘り、

諸本と校勘してみた。その結果、以下の如き文例に出会ったのである。今、これ等を、旧鈔本系、宋本系の代表的テキストと比較してみることにする。

〔金〕 金沢文庫旧蔵本卷四十七〔策林三〕

〔大東急記念文庫蔵 勉誠社影印本第三冊、一九八三・一〇〕

〔管〕 「管見抄」国立公文書館蔵「旧内閣文庫」〔デジタル資料あり〕

太田次男氏「内閣文庫蔵『管見抄』について」〔初出『斯道文庫論集』九輯、一九七二・一二〕

〔宋〕 『白氏長慶集』

〔国家図書館蔵 文学古籍刊行社 影印本 一九五五・一〕

南宋紹興年間（一一三二—一六二） 刊本

〔那〕 那波道円校、元和四年（二六一八）刊 古活字版『白氏文集』

〔宮内庁所蔵影印本、下定雅弘・神鷹徳治編、勉誠出版 二〇一一〕

〔文〕 『文苑英華』 明鈔本（底本は南宋刊本）

〔「台湾国立中央図書館蔵」明鈔本『文苑英華』所載「白氏策林」六十四門〕

〔朝鮮儒林文化の形成と展開に関する総合的研究〕報告（課題番号 一一三〇九〇一一）二〇〇三・三

一、旧鈔本との一致

〔十七 興五福、銷六極〕

〔宋〕

① 凝為慶雲

② 知所自

疑

●

●

三字無

●●●

●●●

〔三十五 使百職修、皇綱振〕

〔那〕 〔宋〕 〔管〕 〔文〕
③ 從善遠罪 徒 ● ● ●

〔四十八 禦戎狄〕

〔那〕 〔宋〕 〔管〕 〔金〕 〔文〕
④ 則彈財耕力 彈 ● ● ●

〔五十九 議赦〕

〔那〕 〔宋〕 〔管〕 〔文〕
⑤ 婦兒噫啞 暗 ● ● 暗

〔七十五 典章禁令〕

〔那〕 〔宋〕 〔管〕 〔文〕
⑥ 臣又聞 無 ● ● ●

那波本は、旧鈔本テキストである「管見抄」、「金沢文庫」とも一致している。とくに、⑤は、貴重な本文かと思われる。

二、『文苑英華』との一致

ところで、中国では、紹興刊本『白氏長慶集』を底本とし、那波本や『文苑英華』との校異を記述している校本として、七〇年代刊行の顧学頤校本『白居易集』（中華書局 一九七九・一〇）や、近年公刊の謝思煒校注『白居易文集校注』（中華書局 二〇一一・一）がある。両者に校本に使用されているテキストが『文苑英華』である。北宋の雍熙四年（九八七）に、太宗の勅を奉じて編集された唐代の詩文の総集一千卷である。現行本としては、南宋刊本系テキスト（二千卷の内、百卷余りが、刊本、他の巻は、宋版を底本とする明鈔本）が存在する。明版本も存するが、テ

キストとしては不可。北宋初期に編纂が開始されているので、その直接の底本は、唐鈔本乃至は、それに近い資料かと推定される良質の本文である。拙論で、若干指摘しているように、⁽¹²⁾わが国の旧鈔本『白氏文集』に、中国のテキストとしては、『文苑英華』は、最も近い本文を有している。今、ここで、那波本、紹興本、管見抄、文苑英華本の四本を利用して、「白氏策林」の本文の校異を確認してみよう。

〔十七 興五福、銷六極〕

⑦	先思病之所由	●	自	得	●
	〔那〕		〔宋〕	〔管〕	〔文〕

〔六十四 復樂古器古曲〕

⑧	則雖撞大鐘	●	撞	撞	●
	〔那〕		〔宋〕	〔管〕	〔文〕

〔七十一 去詔佞、從讓直〕

⑨	亦由昼夜相代	●	猶	猶	●
	〔那〕		〔宋〕	〔管〕	〔文〕

以上の如く、⑥も加えるならば、四例ではあるが、那波本は、『文苑英華』とも一致している。更に興味深いことには、旧鈔本と『文苑英華』の本文が、しばしば一致していることである。このことは、謝思煒校注本に依れば明白である。

とすれば、那波本独自の異文の中には、南宋本とは異なるが、白氏原本に近い文字を遺存しているものが存するのではないかと推定される。即ち、那波本の本文の中にはわが国の旧鈔本、さらには、中国に於いて北宋初期の編纂になる『文苑英華』との本文がしばしば一致するのであ

る。このことから、那波本の本文の中には、原本を少数ではあるが、遺存していると推定されるわけである。

以上の如く、那波本の詩文は、その編成のみならず、その本文にも、貴重な文字が遺存している。那波本は宋本と比較すると、確かに、単純な誤植、衍字があるとしても、諸刊本に見られない貴重な本文を少数ではあるが遺存していると云えるのではなからうか。

追記

那波本『白氏文集』のテキストは、今回、近刊の宮内庁影印本を用いた。従来は、一般的には『四部叢刊』本が使用されている。しかし、平岡武夫氏が『四部叢刊』がこの那波本を取り上げたのは、すぐれた見識であった。しかしそこに見る影印本は、元来の那波本との文字の相違する所があり、拙い補鈔がある。⁽¹³⁾と述べられているように、校勘用のテキストとしては、必ずしも良いものではない。加之、われわれの那波本諸本の調査によれば、時折、補筆のある部分がある。一例を取り上げよう。卷一の「觀刈麥詩」の自注がそれである。那波本・朝鮮本では「時為整屋縣」と作っている。しかし、宮内庁本、高松宮本、筑波大学図書館本、いずれも縣の下に〈尉〉字が補写されている。影印本やデータベースでは、補筆か否かは断定しにくい。この度、調査では、筆者は、高松宮本を、目録、熟覧できた。「白氏策林」四巻中には、補写が無いことを確認している。実物調査の機会を与えられた、国立歴史民俗博物館に感謝する次第である。

註

- (1) 「旧鈔本」の資料の価値とその定義については、神田喜一郎氏「旧鈔本について」(『書道全集』第二十六卷 平凡社 一九六七)を参照されたし。この論考は、全集本には未載。又、神田氏の論考に引用されている、唐鈔本等の写本資料の存在を偽作と決めつけている当時の学者、李葆恂(りほうじゅん)の『旧学庵筆記』は、関西大学図書館に所蔵されている。同大学教授乾善彦氏の御好意で、筆者はその写真を目撃することが出来た。この機会を借りて御礼申し上げる次第である。又、拙著『旧鈔本と唐鈔本』(『アジア遊学』一四〇、勉誠出版 二〇一・四)をも参考されたし。
- (2) 一般的には、「(白氏)文集」は、「(ハクシモンジフ)」と読まれているが、明治二十年代以前は、「文集」は、「モンジフ」ではなく、「フンシフ」と読まれており、「モンジフ」の読み方は、明治三十年以降成立した新しい読み方である。詳しくは、拙著『白氏文集』は「もんじゅう」か「ぶんしゅう」か(遊学社 二〇一・二)を参照されたし。
- (3) 張秀民氏は、中国に於ける印刷術の起源を貞観一〇年(六三六)に求め、元槿の「白氏長慶集序」(八二四成立)中の「繕写模勒」の一句を根拠として、当時已に木版印刷が広く実用されたと述べている。(『中国印刷術的発明与其影響』中国人民出版社、一九五八「初版未見」、一九七八「二版」)。しかし、趙永東氏「彫版印刷起源説略」(『伝統文化与現代化』二期、中華書局、一九九四)の両説によって、張氏の起源説は、完膚なきまでに否定されている。中国やわが国で、中国の印刷術の起源がテーマとなる時は、張氏の説が、あたかも定論であるかの如く引用されるので、是非とも、この両氏の学説を参照されんことを。曹之氏には専著『中国印刷術的起源』(武漢大学出版社、一九九四・七)がある。近刊、周相録校注『元槿集校注』(上海古籍出版社、二〇一三)の該句の註文に、「依照原様抄写、近似後世之影写追求効果逼真。唐時、元白詩文尙未見彫版印刷之確鑿記載。」とあり。
- (4) 那波道円刊『白氏文集』は、これまで、朝鮮整版本を、直接の底本としていたと考えられていた。しかし、近時、藤本幸夫氏「朝鮮版『白氏文集』攷」(『白居易研究講座』第六卷所収 勉誠社、一九九五)及び拙稿「悲劇の善本朝鮮銅活字版『白氏文集』—那波本の生誕を繞って—」(『アジア遊学』一二号 勉誠出版、二〇〇〇・一〇)に於いて、その底本が活字本であるとの説を提出している。『白氏文集』と『白氏長慶集』の両書が異名同書であることは、森槐南遺稿『中国詩学概論』(神田喜一郎編(臨川書店、一九八三))及び拙稿「白居易全集の二書名について」註(2)の拙著所収。
- (5) 拙稿「慶安三年刊本『新樂府』について」(『日本中国学会報』三四、一九八二・一〇)に、慶安刊本の直接の底本を、北宋前期刊本より抽出されたテキストとみなし、旧鈔本と南宋本との間にこの江戸初期刊の慶安本を介在させることにより旧鈔本文が、徐々に南宋本の本文に変化していく相をうかがうことができると報告している。
- (6) 花房英樹博士「白氏文集の批判的研究」一六三頁を参照されたし。(中村印刷株式会社出版部、一九六〇)
- (7) 平岡武夫・今井清両氏校本『白氏文集』三冊の校記は、この事実を克明に報告している。又胡適「跋宋刻本『白氏文集』影本」(『胡適古典文学研究論集』上巻(上海古籍出版社、一九八八))も参考となる。
- (8) 近藤正齋(『金沢文庫考』巻一)、金子彦次郎博士(『平安文学と白氏文集』第一冊)、阿部隆一博士(『中国訪書志』)は、那波本の底本を、金沢文庫旧蔵『白氏文集』とみなしているが、失考かと思われる。又、近時、陳尚君氏は、那波本の底本について「所据為狩谷掖齋所藏覆宋本」(『漢唐文学与文献論考』一六二頁 上海古籍出版社 二〇〇八)と述べているが、陳氏の所拠資料は、島田翰の『古文旧書考』(巻三)であろうか。もし、そうであるならば、掖齋所蔵本は、烏有の本である。詳しくは、高橋智氏「抱残守闕□責在後人—島田翰の奇書」(『汲古』二〇、一九九一・三)を参照されたし。
- (9) 会田大輔氏「類要」所引『白集』の巻数について(『白居易研究年報』第十三号、勉誠出版 二〇一三)は、北宋の官僚である晏殊(九九一—一〇五五)の編纂類書『類要』残本から、北宋版『白氏文集』の編成と作品を、紹介している。
- (10) 『文集』第四解題(古典保存会 一九二九・九)
- (11) 註(5)を参照。
- (12) 『文苑英華』と旧鈔本との本文の関連については、拙稿「旧鈔本『白氏文集』の諸本と『文苑英華』」(『アジア遊学』一四〇号、勉誠出版 二〇一・四)
- (13) 『白氏文集歌詩索引』序文(上)(同朋舎出版 一九八九・一〇)

*資料整理につき、ゼミ学生、秋山敬祐・遠藤純太郎の両君に深謝致します。

(明治大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
二〇一四年七月二八日受付、二〇一四年九月二九日審査終了

The Origins and Establishment of the Nawa Edition

KAMITAKA Tokuharu

Manuscript copies compiled from *Toshohon* (handwritten copies of works widely distributed before the transition from handwriting to printing) and called “Kyushobon” (old handwritten copies) have been preserved in Japan. Famous examples of *Kyushobon* are *Wen Xuan Jizhu* (also known as *Monzen Shicchu*) and *Bai-Shi Wen Ji* (also known as *Hakushi Bunshu*), originally held by the Kanazawa Bunko Library. In particular, the latter copy is valuable as it shows the structure of the original text as presented by the author, *Bai Juyi* (also known as *Bai Letian*). Among the copies of *Bai-Shi Wen Ji* preserved in China and Japan until now, the wooden movable-type printing edition published by *Nawa Doen* in Japan in 1618 follows this old structure. The copy is categorized as the Song edition because it is a printed edition. Meanwhile, because its structure is similar to the old one, it may have been compiled directly from the Northern Song printed edition which also may have contained texts from a *Kyushobon* edition. Driven by this assumption, this paper examines in detail the differences and similarities in the fourth volume of *Bai-shi Celin* (also known as *Hakushi Sakurin*) among the Nawa edition, Korean editions (woodblock printed and movable-type editions), and the Shaoxing edition. At the same time, the text of the *Kyushobon* edition of *Guan Jian Chao* (also known as *Kankensho*) and *Wen Yuan Ying Hua* (also known as *Bun'en Eiga*) compiled in the early Northern Song period are also examined as a reference. The results indicate that, as presumed above, the Nawa edition contains a few passages derived from the *Kyushobon* or Northern Song printed editions. It is expected that a further analysis of the remaining volumes for differences and similarities among those editions can identify other unknown passages derived from the *Kyushobon* or Northern Song printed editions. Quite a few Nawa edition copies of *Bai-Shi Wen Ji* preserved in Japan contain notes that indicate differences from and similarities to the *Kyushobon* edition. One of such copies is held by the Imperial Household Agency. On the other hand, in the mainland China, neither the Tang nor Northern Song printed edition of *Bai-Shi Wen Ji* in the old structure have been preserved, and the existing Southern Song edition is based on a new structure where the first half is written in poetry and the second half in prose. Therefore, copies of the Nawa edition are considered highly valuable materials which help to understand the whole picture of *Bai-Shi Wen Ji*. One main issue left is to further compare the Nawa edition with its original manuscripts, the Korean editions (woodblock printed and movable-type editions).

Key word : *Kyushobon* (old handwritten copies), Northern Song printed edition, Shaoxing printed edition, Nawa edition, Korean edition
